

# あとつぎは幸せな女性のいる農家に

北海道大学 経済学部

教授 牛山 敬 二

「妻が幸せで、生きがいをもって生活している農家には、農業のあとつぎがいるんだね」とヤンがいった。ヤンはポーランドのワルシャワ経済大学の先生で、私たちがいつしよに北海道の十数戸の農家を訪ねて、ききとり調査をやった。この言葉はいわばその結論である。

ポーランドも個人農が農業の大部分を担っていて、平均規模は七ヘクタールほどである。やはりあとつぎがいなくなつて、日本と同じ悩みを抱えて困っている。だからヤンの関心もそこにあった。

いま日本の農業は、北海道を含めてたいへんなあとつぎ不足に陥っ

ている。三百人卒業する農業高校で一人から三人しか農業に就かない。そういう状態が長く続いているから、一九九〇年の農業センサスでは、北海道の三十歳未満の基幹的農業従事者は八・二パーセントしかない。農民がほぼ六十歳で引退するとすれば、このままいけば三十年後の二〇二〇年代には、北海道の農家戸数は七千戸に減ってしまう。現在の百二十万ヘクタールの農地を維持するには、一戸あたり百七十七ヘクタール耕作しなければならぬ。そんなことは不可能に近い。耕作放棄の農地がいたるところに出現することになる。

を失うことによつて、深いところで崩壊しつつあるのである。農地が過剰になれば農地の価格はどんどん下がるだろう。農地を一箇所にまとめることも、規模を大きくすることも比較的容易になるだろう。それは農業を再建するプラスの条件になるだろう。そこで新規卒業者でもリターンでもいい、また農業外からの新規参入でもいい、いそいで農業就職者を増やさなければならぬという農政当局者の焦りはよくわかる。そのために農業においても他産業並の労働条件を作り出さなければならぬという提言もよくわかる。集落下水道の整備や居住環境を良

くしなければという提言もそのとおりである。

だがここで言いたいのは、それだけではなお何か足りないのではないかとということなのである。

人間はだれでも繰り返すことによって仕事を身につけていく。農業も同じである。だが農業はつぎつぎに作業を変えながら、一年かかってやっと一回転する。したがってたとえば稲作をとってみれば、農民は一生におおくて四十年、四十回しか稲作りを繰り返さないのである。よほど興味があつて、研究熱心でなければ、優秀な農業経営者にはなれないのである。また意欲があつても、一人前になるためには長期間の実習が必要で、それをもたない人がいきなり農業経営をまかされても、到底うまくやりこなすことはできない。

たいへんなあとつぎ不足なのだから、農家外からの新規農業参入者に門を開いていくことは必要だ。だが農業の主たる担い手は、やっぱり親から体験を通して学ぶことができる農家のあとつぎに期待するほかないのである。



牛山 敬二(うしやま けいじ)さん

1933年長野県生まれ。農林省農業総合研究所を経て1980年北海道大学経済学部教授。北海道地域農業研究所理事。北海道農業研究会会長。専門・日本農業論。経済学博士。主著『農民層分解の構造—戦前期—』。『経済構造調整下の北海道農業』（七戸長生氏と共編著）。『ポーランドの農業と農民』（吉野悦雄・坂下明彦・松井憲明・山村理人各氏と共著）。

あるときテレビでNHKの北海道農業特集をみていたら、農家の高校二年生の息子が、父親の涙ぐましい頑張りを見ながら「あんなのやっていられたか」と叫んでいた。親に共感しながら、そう叫ばざるをえないきびしい現実があるのである。

農家で「お宅の娘さんは農家へお嫁さんに行かれますか」と尋ね

ると、「農家にはやりたくないね」とほとんどが答える。そう考えざるをえない現実があるにちがいない。そのことは息子が嫁がなかなか来ないことと関係ないのだろうか。

もちろん農家の息子が妻を農家だけから迎えなくてもかまわない。むしろ別の家庭生活の経験のある女性のほうが、農家の生活の仕方をうまく改善しているといってもよい。暮らしたのもつ文化が多様になるからである。たとえば長崎出身の女性を妻にした農家では、その妻のカソリックの信仰がそれとなく保障されていた。それを認める暖かさがその家に明るさをもたらしていたのである。ゆとりをなした砂漠のような都会生活を実感した女性のほうが、緑と自然に包まれ、夫と同じ仕事をしながら生命を育てる農業の素晴らしさを、客観的に理解できるかもしれない。北海道の農家は外からやってくるひとびとを心を開いて迎えることができる。心が広く、おおらかなのである。

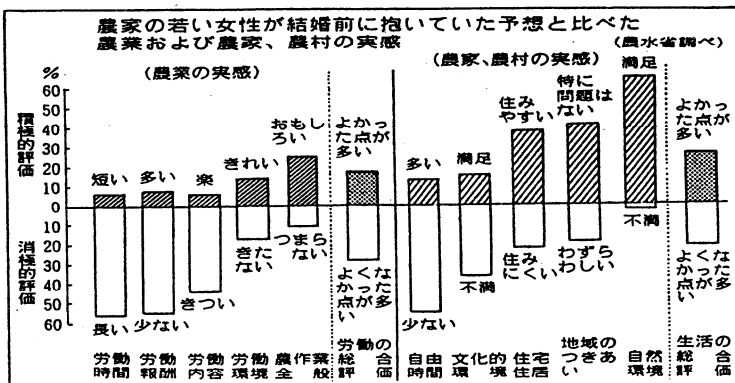
子は親を見て育つ。農家では経

営と生活の充実が密接、不可分にむすびついている。親がいきいき幸せに農業をやっているれば、そして明るい家庭を築いていけば、農業もわるくないと子は考えるにちがいない。

ヤンはそういうあかるい農家を、女性の生き方・妻の生き生きしたあかるさに見いだしたのである。ヤンが訪れた農家のうち、自分の収穫した大豆で、自家製のおいしい豆腐を御馳走してくれた農家、ゆり根のグラタンとから揚げを御馳走してくれた農家、お琴の演奏を聞かせてくれた農家には、確かに目をかがやかせた農業後継者がいた。

そういう本当の豊かさを大事にしている農家が、現にあるし、すこしずつ増えてきているのである。他産業並の労働条件・経済的安定も確かに必要であるが、それだけですまされない大事なことがあって、それが家族の知恵として農家のくらしに活かされているのである。

わたしたちが今すぐにはやらなければならぬことは、そういうす



ばらしい農家の増大を加速させるにはどうすればいいかを考え、すくんに実行に移すことではあるまいか。

▲ 1994. 4. 12 公表の「農業白書」から